

古今著聞集

一九

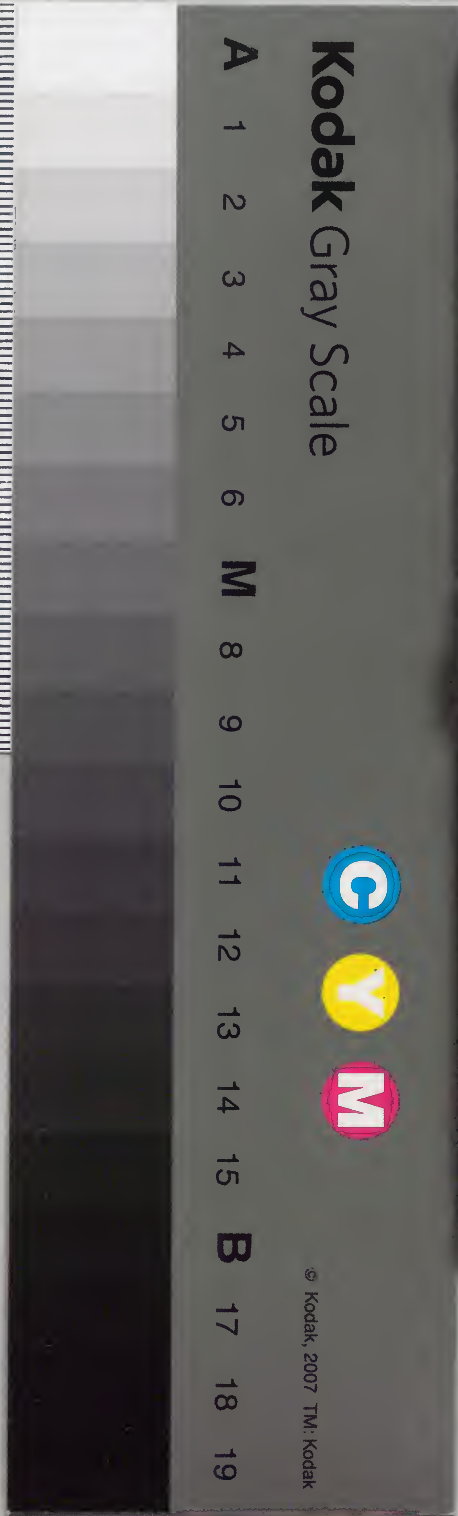
太政官文庫		和書門
一	三三三八	
五		
冊	架	函 號 類

内閣文庫		和書
三	三三三八	
二		
函	冊	架

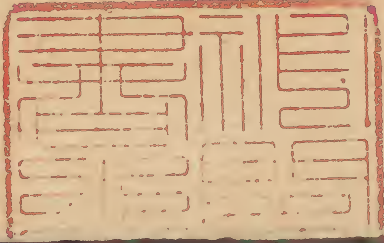
五一九



内閣文庫	
番號	和 32338
冊數	15 (15)
函號	210 143



南
416



古今通纂卷之二十一

魚虫禽獸

禽獸與虫其彙且千皆雖不能言各以有

思者也

宰府... 十月の比 塚中... 十二年

宰府... 十月の比 塚中... 十二年

宰府... 十月の比 塚中... 十二年

宰府... 十月の比 塚中... 十二年

宰府... 十月の比 塚中... 十二年

宰府... 十月の比 塚中... 十二年

古今通纂

二十一

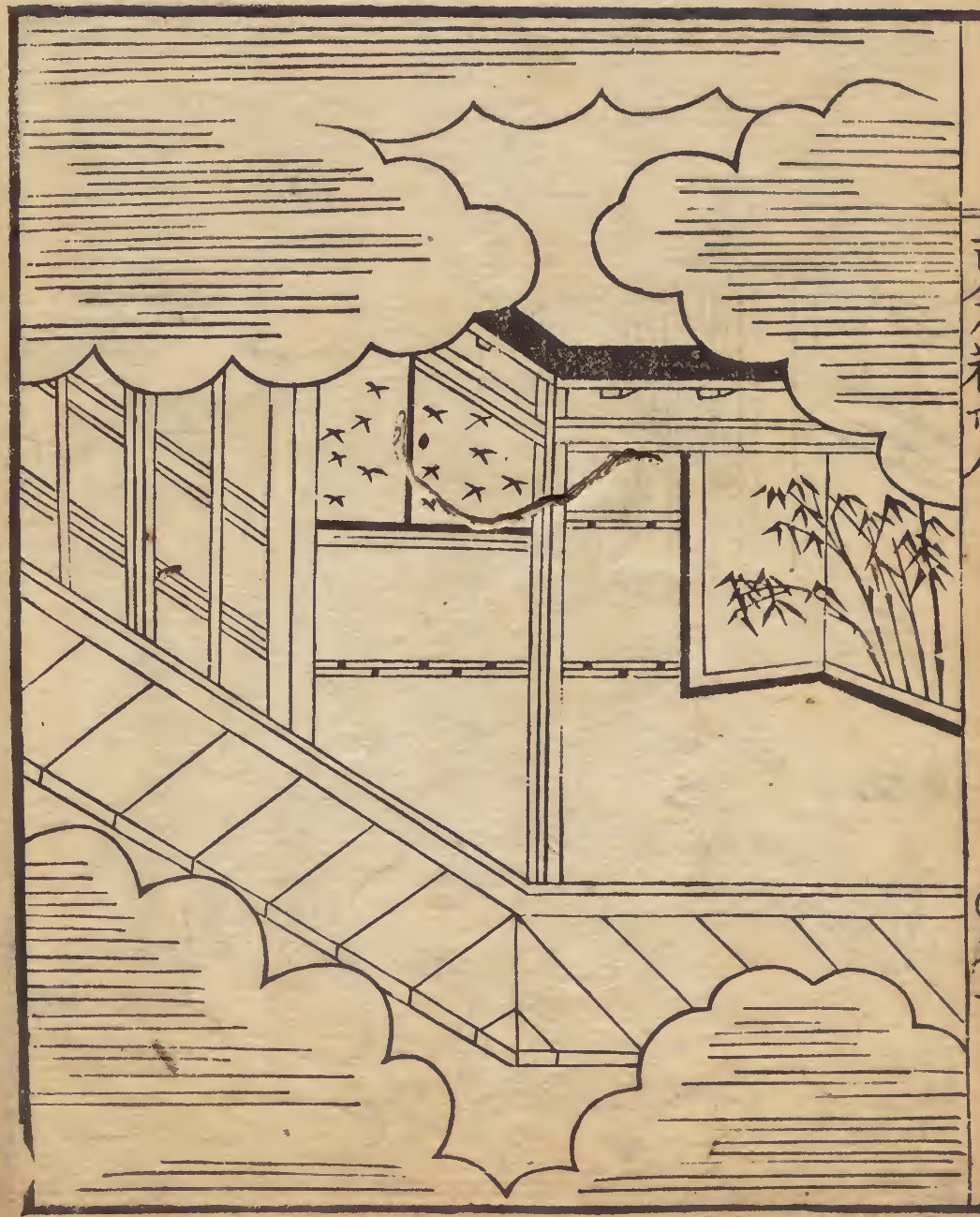
秘人これと追々をばその靈人よつたてのひんが
久くいさよすむ今も像といふあり先やうんせ
と海がなれ相伝ひつたことぞいひなす

永延元年八月九日舟中近のる傷めて競る又あつり
とるに二處に府を下船公里橋坂七葦毛にあり
とるりたを赤三毛也心回九鶴毛ふあつりまはり
たぬ人橋のより鶴毛次日の物屋まひもなな目
海濱うらぐとやぐて死すもり歎をねも負つるも
さひ入るりもろあやふと伝ひつたこと

一条院は討秘傳の書ありとるたじいふあをき



二又三



とうけりきり西海の如きまめんくまらつらひくま
 よとくもふ目とてなひたりまがたつてのくまめ
 海成粟田の十種はけはよつたてなり今もかき
 きざりも一まのびつらふもあつて人成たを
 ころあつたふれひてきよ下ふわあつてつらひの
 かりんるよりあつてけき成きまらりかたわられ
 透物よちたのふまじりあつてりかたれねあ
 きんもえちじやひくもる者もきりその時
 此書同やくのり人ふあひくあひのあつたけ
 事とてしまたがらふもあつたけ西海の人あつたけ

とうりひく教威きょういはわづりたつていひぬしきり
 うんていしちまじ事しられぬべし由書よしよりみ
 ぬと人さつむやいりていし希けいきとまみやうにびせ
 教きょう字じふりつて一とて書をていりせしづみあくゆ
 書しよのしとて一ありていし書しよ字じ一きれぬ教威きょういとて
 とあつらひの男おとこさされく由書よし成始なりのせりす
 ありていしとうりひくありきり南なん教きょうの地ちこれい
 ありんばさあたるに由書よしの後のち地ちはすかあはなれ
 ば奥おくわつまりうづびるるに書しよとありきれはわを
 てぞり知ちたある難なん成じやうとてわづりきりしれは書しよと
 とうりひくとうり門かどよりとてたつわやと書しよ成じやうは
 うとあまゆつ成じやう知ちとていれぬは書しよのみと後のちの
 書しよあてひまびくおむ母ははが振か舞まひとて後のちふみと書しよと
 がつうまうの由書よし人ひとのゆつ成じやうありゆりて今いまと書しよ成じやう
 せゆらぬなりし後のちは門かどとてあがしはしと書しよ成じやう
 此こゝ邊への書しよあていしとて書しよとて教威きょういとありていしとて
 何なにもりあるやと書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて
 信しん信しん書しよひらの那なは書しよ成じやう田でん園えんとて書しよとて書しよとて
 書しよひらの換か換か書しよ平へいとて書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて
 小このかりきり時ときの書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて

とうりひくとうり門かどよりとてたつわやと書しよ成じやうは
 うとあまゆつ成じやう知ちとていれぬは書しよのみと後のちの
 書しよあてひまびくおむ母ははが振か舞まひとて後のちふみと書しよと
 がつうまうの由書よし人ひとのゆつ成じやうありゆりて今いまと書しよ成じやう
 せゆらぬなりし後のちは門かどとてあがしはしと書しよ成じやう
 此こゝ邊への書しよあていしとて書しよとて教威きょういとありていしとて
 何なにもりあるやと書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて
 信しん信しん書しよひらの那なは書しよ成じやう田でん園えんとて書しよとて書しよとて
 書しよひらの換か換か書しよ平へいとて書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて
 小このかりきり時ときの書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて書しよとて

御堂後儀同之旨の御車小のりぐらてはわりのきわり
 するに建儀のいまりのきる亦儀半好より引きり
 多秋心は書友威ぞとせ給ひくび牛ハ引ぐより
 知つたりきるぞとてわりされきる儀同之旨こそ
 祇園へ入れば彌治よきのせつりきる人のこびる
 せあつてさしれ多き儀書たごりて給ひく御車
 と先よせえぞならぬくうとせ給る神約とて
 とせ給ひくゆり

越後の由よしきといあらは法花院おれ借儀
 物々浦一きる小二の猿ありて給儀はより二三を



五人

ONET

あてての猿死してまのやも成りくわり入る夜
あはれえわがくびく死するあまの傍ありおほ
ま事うなりおほま猿のうごひとらぐえん念御
て廻向して仰りぬ後神をばうととえんぞとて
はあれとら成ありその中よま成りてうりぬ
後軍よ年とてく祀躬お下南西の守よあり
くごりまらむらにえみもま成りて信信とてうり
あまのりひちふ書とらうづり神やありまは
るればそのひりの指神の信りまらむとて
よとひめて出くは神の根えとて西因とて

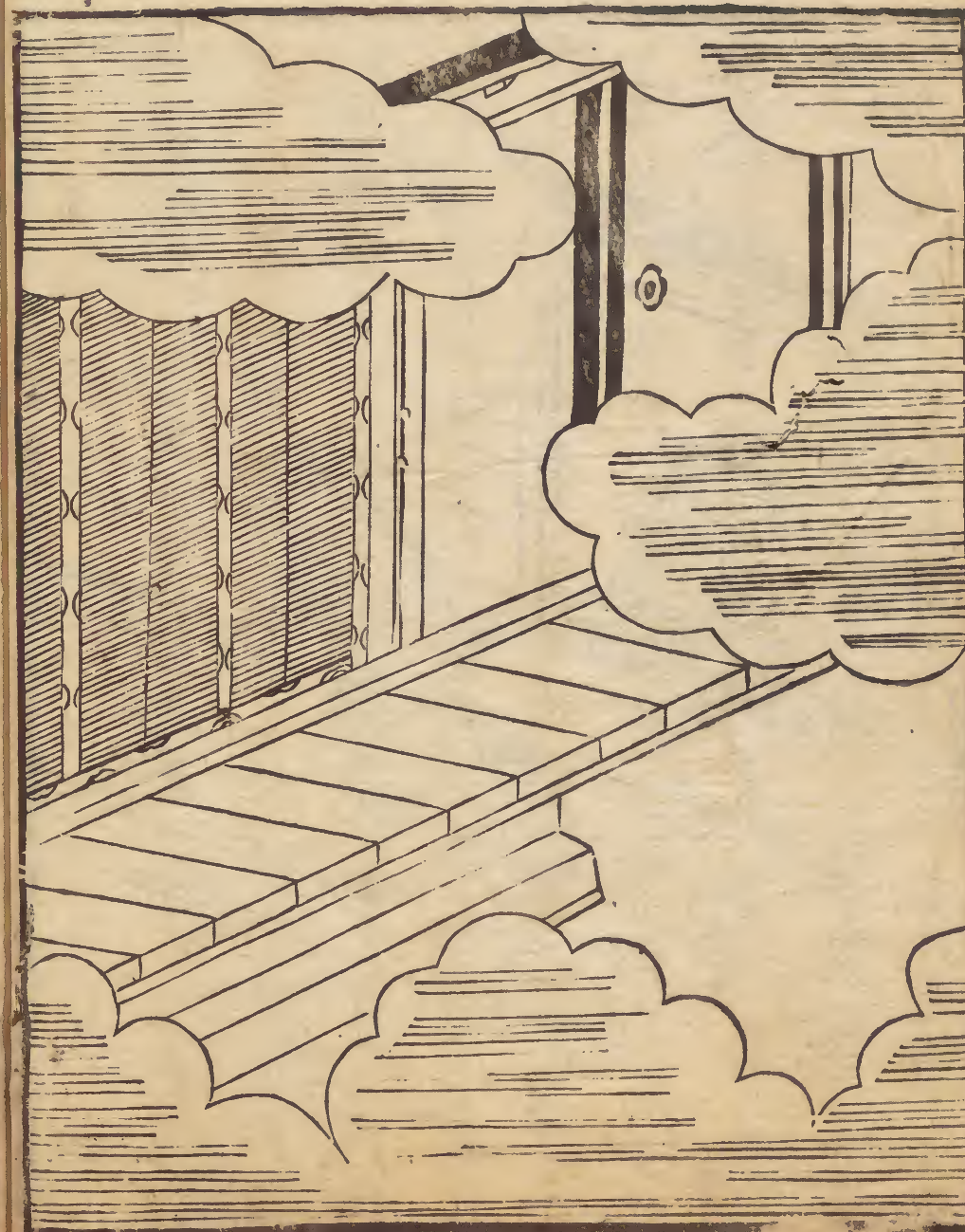
報死してのくれば死とてとまんがとあふ
西の身小信りくごりまらむひり一は猿はは
あへ神のちりうまよりそ成えとてとて
三平部と書まらりあまのまごあり所ふら
うらうらあわ
あつ男目くれくのち朱雀の大徳と毎り
いぬあま女入あひらりまら男かうりて
とあままらりまらまらにひりまらら
もあまのぐんがくもまらりまらまら
ららうりて交通とあまんとまらだ
らら

ふなりねまばうらまけまんとすかゆはまはたのり
けそわくごうねるはひよまあじいとしひくさうだ
ねふあふあのがぶらもあゆえどてねあねらふ
りぞ女せんくねくあむくくまで神んごうは作
あもあれどいあみごうけうがれあ命にこそ
とりて作らまんよあさごひ作らあまらうてあわえ
まとおほさくつごあなは法花經をうき信者たて
まあひまあごーとしひくさうまけまねだ男さ
ゆのゆのわじじまあひまんたかくわいとびあきり
ねもすうううてひかくさあよあうきまきり終り

ちさきあもあけごたありまねだ女あまらうま
とそ男れ扇あけひくわあうまごうつら半あけ
まねわくはあまふわりのねるそのあうとせん
おほさく武徳屋のやうりあはあごーせりひくわ
くれね男所くは武徳屋よりくこれだ一の執扇を
おりてよおほひくあくあしうり男わのねうあさ
まらうねりあー七日とらは法花經一神と書くあ
してあまひくありてく日なわく夜のあまはあか
天女は園遠せくきてくうていしくこれ一雲れち
りあうりて今切利天女あひまうくかりをほごて

けいぎのまもてしゆゆりのまの巻せりされけり
 貴首（シヤウリヤウ）のたれたる舞のゆきまのりてむらひを
 舞人并時危をたれ人めて歌はまのりを野（ヤノ）神（カミ）のま
 とせゆらる神（カミ）神（カミ）よりつて僮僕（カウカク）せらしては
 せしせり十餘軒半のまのりよりより歩
 せしせりゆゆふよんむむゆらりて舞（マユ）ふ
 内裏（ウラ）のまのり舞女（マユメ）をまのりて舞（マユ）ふ
 ありきり神（カミ）の神（カミ）方（カタ）のまのりて舞（マユ）ふ
 歌（ウタ）の神（カミ）方（カタ）のまのりて舞（マユ）ふ
 くる（ク）の神（カミ）方（カタ）のまのりて舞（マユ）ふ





むらさき

元二年冬のころる貞守宗季をころうたれむ哉
ゆうをきりきりなげころうて尾がごとくきりりれ
のめをぬきりきり足踏をまつころりきり人の
ゆりきりきりきりわづげころりせりり
くひきりきりきりきりきりきりきりきり
らせりりきりきり
傷延のころり宰相おきりきり人の乳母描とくひ
きりその描はくころりころりころりころり
くれはゆりきりきりきりきりきりきりきり

ふわありのきり付あま入くはけきぐさまうに光を好
乳母つひふじ移こにむひてなんが志ねん付ときよ
足あぐら原とよへらあつらねあゆむらあづつらね
と事一十七ふあや平ゆぐさ成とく原をせり
きりときぞ

あつらふあまあつら移こつら移とくをせ移ひま移
その移移とよとよあやと成あをれどもあえく
くあづりきり人れまへてとあらしき移移だあ
移こかり

久あはは毛生く移移ああの人知は移移ああ

せりきり甲三守どろりくさよ青魚の毛あひら
あぐらすよとよづり移移とよとよあわらうらね
府見とせまひる付とくづり移移あてせ移
御しきあ

後白河院の時とき移移康忠といふああああ三葉
鳥丸あはま丸の移とせああああああああああ
らかりああああああああああああああああ
れああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

永治二年八月廿五日山仙洞を結念此年河のきり

三つ侍及侍従と下れ中面の事つゝの御作のりのも
たふはまうこれた方歌内苑以新伝下た方歌右近
中お定頼下へ前承應後此樂よわつて地巻一
面と現く又言を物とまのの巻れと一歎とせしむびく人
ありとよふ報の望本とうく巻枝よ用之報巻
とまうこの平うく八人半へ又どりて巻枝とせしむび
くまうの御柯の南ふ平の鶴巻とあくまふ報鶴
とまうこのり座れ赤の袖よまう同ふわうてくじ
の花巻とまうく揚負れ巻とくまふ報れ巻
とまうく大較証較とくまうの良ふ盧楊樹映

はりてうこの同お赤丸の番巻とつりてうまうり
牡丹歎冬かみんがら紙はりのうこのた方此今人れんじんは前よ
巻集とた方今人の蓮花巻巻は集巻とまうこの
く皆巻の後列巻とく南の門より今くあまよ
巻巻とまうたごうこのおつうた方歌中お定
頼下事具と巻とを巻とすあつら法巻と出
御わりて人歌の程中并理房下お巻紙巻
とまうこのしむびくまうの巻と巻後お下みれ
中門のおよとつりまうり先た方今人巻巻巻とた方
今人お中門を今く巻をのわびまうり巻巻巻

事れやうとんそんそひく追ものびとしくこれ
 へのぞこ飛つりかひびくしをれたいゆをにら
 くらざりせねぐわやしくせとよりそねだわびれ
 ひのお大ある計とくしつりさるううくしとく
 くりそしあまおあそるしかあし計とねえみせ
 のあまそるにやぐららあし落りりおせりそ
 よりそ打をあらしあまおあそるしかあし計とねえみせ
 若めそわびぬうくめそわびぬうくめそわびぬ
 されとげざしつるをせねだらそ追さぬびつる
 とぞひひるるされど人れあまの珠のたひとびぬり

づしそしつる計とねえみせとあまおあそる
 いんやあかおあひくそわあまおあそる
 まあそりれそあまおあそる
 後進ま性ゆれ堂ありの業降まそぞいあある源三左衛門
 うけあがそねれはまそつがあ馬えが討し書を假託
 くらたりやあけしそあまおあそるが年久しくかろそ
 とれねてまろそ竹くろ候あそらんそらん候あそら
 て物きつたたあろくらあしあまおあそる何とあそるせん
 せねとねる打小打付くそ年久しくそあまおあそる
 てわりせるとそ討し書建立れ年紀とくそあまおあそる

古今卷二十

古今卷二十

かゝる志ありされど猿先ハ打すてくひのあまきり
あじむかりし事まのあつりえつりしをて別
上人よりきりし

を法帝隆^{ひんちの}の船よ一人此上人をきり大なる
猿よりひかりてえんの上人如法理かんえくせを
と解て神^{かみ}波とさきり付との猿よひつてえん
人ありせん是程の太^{えん}船よ^{いよ}波をどかしてま^う書生
の易とすしといひぬしといひつりされど猿より
てゆつりいひん^ん足^んをさつりをたつてある人なり
うしても救猿をせむ事り^か物よ^かもむれたすど

り方とあつていふやうい孫他の船ひりてぞり義人
れりやま白^し衣^い毛^けりりる^るな^なりひかりる座おきて
えんの上をぬきとえきりつらてつらたつて
ん下^け船^{ふね}のあつて解しといふ布^ぬを^をとめてあせ
揃^{そろ}ぬしつてあつてとぬん^んつりきりる^るを^をぬ^ぬり
のりてひびまれば行^ゆり^りけ^けきりる^るぬ^ぬ追^おて^てま^まき
猿よりえん^んを^をきり^り人^にを^をぬ^ぬり^りお^お中^{ちゆう}を^をぬ^ぬ
まきれどるぬり^りみ^みあ^ある^る人^にを^をぬ^ぬり^りお^お中^{ちゆう}を^をぬ^ぬ
と舟の中をさす^すた^たは^はぬ^ぬが^が童^{どう}を^をぬ^ぬり^りお^お中^{ちゆう}を^をぬ^ぬ
つりの事とあつたれどるぬり^りお^お中^{ちゆう}を^をぬ^ぬ

新編

三

一どしてとひゆあんを云海とにそひりまうよりと
 赤湯と売の目ふり入りの新よわなたがら地
 おくびりくといひらめだそやそ死ねうここと
 てんさんあれいりばせんそとそざりを卯月の末の
 時斗ふを湯をいよとそつるお徳お病をわ
 ありやくおあそいりつる徳めくすおびりし論考を
 よびくいのうもるにらあなれ靈を病にわ
 きそいらいのうたうあす大移りて日く人介
 といぬまれつるまえぐといふ志ぐ身そととらん
 とそと完よといへる大徳のらうまればよおと

といひをへていふが命とごはつるごとといひえをそ
 ざりあゆしてざりをもあはれまきざらあんのやけら
 みたがりばこれやがれらるを別取もやそあ
 くらあんのやうきとりやどぬりきりあうれま
 ちがく人のまあごといふ
 兼久正年の友れら武田左衛門光隆河内守はあ
 けすそあて移りていさるふむと徳と町中へ追おえ
 ぬくよ村きりよとそとらとそとらといきざりは
 てざりをも徳とあよゆりていそ徳とつあごそそ
 おああすつるう徳大あつりきり一足の徳死る

古今卷三十一

二十一

猿をばしつとゆきりてを猿よひやいひた分ぢち
 ちもぶよどりとのが素きどめてまざるゆきそびえ
 かりざる半へん人よそ武田がわづらひあるを持
 ぶがせしきそゆきりてはとてそわたりて
 又目め命信^{のふた}が持せしきりて大か猿を定まり
 追のむせいでとあらんとまざるよを猿ゆびとて
 物と現しある神^の人へははあやそとさうゆきも
 射あらそとまざるんあつるにたまはりまゆひは
 くれどもゆびさるる人へやりて足まれば大か
 麻^の足あしりまりの麻と結てとれをぬすまると
 ちかたにそとつて麻とぶやがて射とわ
 てまじ猿とぶゆきすつてとれも麻とて射まじり
 信をわくびまのむじんあおゆきるとそと法理を
 書つりてそとつたりまじり

そのまゝの猿^の形は平島^の河上^の産といふ所は武蔵
 阿^の園^の梨^の掃^の先^のといふ所はまづえの掃先^のが又^のま^のよ^のひ
 ぢる牛^の形とてにうぢ^の伏^のあ^の半^の持^のま^のり^のま^のり^のあ^の死
 了^のち^のま^のあ^のそ^の物^の成^のま^のり^のま^のり^のあ^の死^のれ^の人^のあ^のり^のて
 身^の成^のそ^のま^のり^のあ^の死^のれ^の人^のあ^のり^のて
 ち^のひ^のま^のり^の人^のあ^のり^のて^のま^のり^のあ^の死^のれ^の人^のあ^のり^のて

西今巻三十一

ふさくうめさくしびるより一多派ありせしむる
とぞむし首尾わひまひてとてさうらふねばはよ一
くうめさくしびる先きの何ぞとぞの持本の書生な
ふよさるあやわつれぬさく

時また府一士の河牛大鶴唐人馬帽子赤茶
記師李母びびりそのゆへといやとばさるばさ
あさひさくしびるあや一上印記より一とありせし
とい先創も作らるや一糸ぬもた長の上た糸
昨兼師光るどとらう一紙

一とありせしむる

二條仲細言定言に教生念ふよ東向の時二条
宰お雅経ののまへる張るあさくよみゆる

八月の教をたまひまのく
ささひのせんるあわらせ

かろ

わあつれせはまひ一とあり
ふさひん一とあり月のあぬ

あゆみおぼほひさうれひよどりたごのこさとい
子息の侍はまひ一とありさくしびるあを
さりあやるとさくしびるあまのあまのあまのあ

西今巻三十一

三十一

うりされど侍候おごのそとをく侍とてをり
口を侍りまゝ

よき一まゝと山北うけをかり侍

かゝり侍とてまき萩のうらう侍

このうらう侍とて座敷又おごれと座敷一
とてまゝ

おれま又林のうらう侍とてまれぬ

とてまゝにうらう侍とてのうらう侍

後久我を政大臣およおもあがしり侍のまゝとて
お侍にあらせりまゝ侍とてお侍とて

おひまればよみくつうりある

いとせん山をれともお侍に侍

おひの侍とてお侍とてお侍

お侍とてお侍とてお侍とてお侍とて

お侍とてお侍とてお侍とてお侍とて

お侍とてお侍とてお侍とてお侍とて

お侍とてお侍とてお侍とてお侍とて

お侍とてお侍とてお侍とてお侍とて

お侍とてお侍とてお侍とてお侍とて

後河川侍の侍とてお侍とてお侍とて

此厨佛所備をのめめにさるる時をたれ
らりやよ山ありその山よりさび多くおひぬは
成すくまは海よりざり或山がれまざる一人を
してけりさるるふ件の山よりおをさるる地あり
まらさあわまり汁へくぬらびとそくけ三人のま
みありて大は成わさそまんと志ざりさるるま
ざびくあげくきたんあさ事かぶらぬていた
ものろづさうほほほまらりれままざるわやよ
校のまざる成おびりひり山がらうらりかおほえ
ひふび付らちめんえうとてまらまらりまらり

お重あぎんまらいかぬを追せりまぬび又いひと
りてわくそたぬひそらんぞとあひく杖まよこ
えくそまよりまらくせおそくびの神成つく
おらりまぬさるくひらくまらふと山がらうらり
と持くまらりあせ川を後希まいのりひらそとあ
うりまざり
あ身の比伴よま先神保のうらまはるるといま
ま一人まらり一里まらりまらるるあへりまらるる
まらぬれたエとのふわら人を真とひんそくあひ
わりまらるるよ真のまらりひりて見あらにの

古今考

清のやうに秋あつたにむびつておひつりせれた怪く
わきぬおろし川よりきつにつやくとぬくつてさごご
の福すこせ川わぎく竹きりそ福すこ川よき
てふれくちるあぐよあげうせあきりたエあされそ
わりきりあぐこれるいさごごくの福よの嵐くら
くて島しまの物あぐとそをれくあうさひて島しま時
ともえはくり竹ぬえとやぐたにそあつ先湯の
そいさ福とこの竹らん半海とに柳やなぎごよ
しだゆき

文内ぶんないなりとひのり中よ盡歎たふれ事わりきりふ

とびののまぶにけぬぬのくおぬぬりきりよ真まこと
酒よえひくますびつ瓜うり枕まくらよしく福入ふくいりよきりそおれ
着きよらいさるおま尼あまその敷おぬくまびののまぶあみお
ぬくよなれたるけいそあぐくたてとちきりおど
ろさえみまごん物もけり又福のまばらたのぞくよ
んあうくそあびくまわりをれよおほくそのひ
えぬ小こ曉あけよのぞくそ又目試めしりてわげくんるにあ
の中よ小こ尼あませうくまかえうつよんつて座ざぐそ
ませよきりおどろさわごそえそれよりなぐくあ
とがらわごりきり又たをち美うつく信しん光こうとのひりりえ

古今考

三二

二唯とびか盤部トれりやへりそめ一唯と浦人
へんぞれど浦人なれ切らひてぞりされたあへ
しおしそのあぢらひとたよりざるそぞ人真と
りあつたあれてこの物ありや
みられふ回村の御の住人ふえあふぐととるたて
おろつらひく海がもるはどしとせむおしく海りきる
わらぬまといあふよととるはづひわたりきる海なる
まどりちていりきれたわやまうげぬやとりあへん
まてぞりもとと一坂屋てそとあてさりうひええり
とがえがらよととるよとるぬも部のおのるまよ

いとお海あてきりつあのちうやうおつまうにえ
さあぐとららわたりわやとと何人のうくおれ
と何れれこのあわらぬまあてさるわや海りも作
ぬよとととられたととある一落くるおびよと
どして系りてうきとととびあひふよりてとらあま
あぐ人作まうととと一首の弁法とあてた
くさりあまり

目くらねんさきひし物減わりぬまの
まあをうたれのむとり物そらうい

わられようどとあふやとに中一日わけて後えが

とんぎれぐえぐろよまぎりの書ざりれもはたのり
しめしつまつめさて死よてまきりあれとみ
のふえやぐりともとてゆてあかしてざりよの
前形アを捕仲能邪トが然よん作
天福の比ぬと人ののやまりろめれ鴨とほめ
りらきぎり仲よとめらけきた斤目つがまて
ざりその鴨りぐははせぬらせぬらせぬら
りのぬすもつらやんともとめらきされぬら
足つどて目斗みそは鴨ゆまふざりそのと
ふがはは付つりきるはわ中へておてんきだ

うかかん書つりきり

あつとまめつりあつとまめつり

ういこのうもとつり

大津るのわあれつりつり日あつと人の大津と
とりきるはわらつてわらげぬらとどつり
ぬらつりきるはわらつてわらげぬらとどつり
あつとまめつりあつとまめつり

つらあつとまめつり

足利なるは義氏ゆつり美佐ゆつり
ざりもあつとまめつりあつとまめつり

よつりたれど前結中光村よつて打せられ
まのぢしきまらりよ誠よを具わりてあしひくせり
きんんあひつてきこごうゆよとやまればまるせて鳥
懼よとをこりせりこごうのこりたまひくよと
ごゆあせめあせをればよ下目成せりて具
しきり年とてこりおのじ徳んせしひりせを
ぬごりひつにせおごりせれど具と事あまの
せつひくおのじ徳んせとせきり件の様やぐ光
村わづりて事おごりせり屋のおふつあつてこりせり
ぬいごりせりおせおごりせれこりせり

後尋る人もせごりせれど念あれたるおごりせり
おあお作人を入れたるおのききり男なりせり
と死つのは様と射きり或白山成るるに大様と
せれどあよ追のがせしてこりせりおごりせり
りせごり政よあよりおらんよとせりが何とやん
おとあのままにたれくやうよするはかたせれどおごり
なりせりせよものがたをわひく地よおらんとすれ
どおごりせりひつる成つておけんそまればこり
とそんとあきりてこごうの又およつてそとをわづり
とせりりくおびくせれたれ子おごりせり

むりろともみ地よおらみきりそれよりながく
指と射りしりそいそあてきり

指は必は志をよよあまよりづりな地^ぶの耳^みあひ

ふか時^{あか}お現^{かん}しく人^たはま^まきりえわあめ必

成^なとせれ^れじ地^ちお^おる^ると^とあ^あて^ての^の村^{むら}人^{びと}の^の戸^{かど}を^をと^とり

てよげう^げくれ^れる^る程^{ほど}は^は向^{むか}後^ご人^{ひと}な^なを^を持^も監^{かん}ま^まの^のが^がと^とわ

りあ^あり^りた^たの^のこ^この^の海^{うみ}と^とま^まを^をり^りあ^ある^る自^{みづ}地^ちい^いて

う^うり^りき^きる^るに^にま^まい^いの^のし^しあ^あれ^れだ^だま^まん^んか^から^らな^なま^まの^のい^いき^きり

み^み地^ちの^の海^{うみ}と^とう^うり^りま^まを^をけ^けて^ての^の行^ゆく^く海^{うみ}と^とま^まを^を

あ^あと^とり^りそ^そあ^あ毛^けと^とひ^ひを^をて^て地^ち小^こ目^めは^はり^りけ^けく^くあ^あり^りき^きる



古今卷五

五十一



かゞらうぐらうり何りては地をぬたよのまのり
みすぞよまをぬ件のよまのわそらまはつらま打
ま物よえわくをば地をまのてまぬらうらうら
てのまんとするはくぬら地の影のり下まのすま
てびまといつらまのりつらつらぬれて地をぬた
ともたうらが治中まはよくまられてまののまぬ
やがまえ一西へらりよまぬらやうまぬりぬまら
つらよ打たぬらぬらうらぬらぬらぬらぬらぬら
まのりつらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら
地をぬた人ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

古今卷五

五十一

中書と其の紙よりかきとて座ぐらうせぬぞり
をり侍りおせりくしき申へ

徳川府にお府生奉れ方とるおどり紙紙を上

人よまのしせつとて御書よあけきりきりりく

わねまごしとてあのお紙くらせ侍りおせくま

てゆしとてあのおふりそ中河の御書

奉ぐりやとやりとらせ侍りと建ち六年十二月

廿日書分の所くたんのあよ前にお書の富小

紙のまより奉りて昨日一日出違ぬあり

おかこやととめとて敷紙よとあつり

をあつらひとえおねゆ侍りのうとらふ書と

書とちよつけく侍り

まよわらんまよわんのまよらり

のまよはは代のまよらり

おとよ又お房ふらりて禮紙より記ておねぐ

むまびつせり

まよははひとてまよらり

おつら井のうよらんら

は半直書紙つとらおとておとて

おとておとて

いふは風のなほをれば片もばおれつまた命のいふご
のがききりあきりともあはれふいひつらつる唐
れ事あき天いつらあきことあつせり

楚襄王晋国とらんとん孫休教これをつあやして

いよく世の楡ヒヤクの木のうへは蟬セミのあはのまんときり

まうらう虫蝸カウラウのさうさんとするはあつて蝸カウラウま

蝶とのいふをりてうらうは芳カウラウのさうさんといふを

あつて芳カウラウ又蝸カウラウとのいふをりてあきのあはれ

う成りてうら子のさうさんとすくをあつてあつてあつて

芳カウラウのいふをりてあつて深フカイ谷うらう小海カウラウのあつ

事成あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

て後ゴ宮とくらのいふをりてあつてあつてあつてあつて

とくをせあつてあつてあつてあつてあつてあつて

衛エイ懿公とくらのいふをりてあつてあつてあつてあつて

とく下とくらのいふをりてあつてあつてあつてあつて

てあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

よあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

ありあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

船イネ公キミあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

うあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

やうなわけねんぞて人々をよりの多幸收
拾の功蹟をいへく一部竟高の儀といふ今日此
あゆまざればゆきまらぬ

杯は集におひくハ他人とゆりすへく此あり子孫の
中には堅誠とそむけて感外に出とまのあはれ
子孫よりへん氏との神なるす照録と如く
さきし他人よりして許るあるへく事よ信く思
惟といふこと一織茶の蘭さく終閑の儀候くま
よ八間出建とゆらとべく傳えられたの起とまハ皆
氏之非はゆるりまきやうよ二十巻和簡の終後を

よしてひるへくして八相値遇の傍因とせん
柔輒借く文佛様後起く教といふ信やいふ
ゆかり

建長六年十月十七日基後胡右筆
記之當時棟雲行々青嵐漠々満
之殘菊黄紫交色初之小泉鴛鴦
雙翅閑庭之物是動我情者也

曆應二年十月十八日深六旬之老筆
終二十帖之写功早且為休當時之徒

古今著聞集卷之二十一

甲子

然且為備ハタシテ後日ノチノヒ又マタ學マナブ子コ也ナリ可ニ秘ヒツク藏ク

老萊門 在判

古今著聞集卷之二十一終

書林

武江

元祿三年

庚午 孟春吉日

同 同

武藤与惣兵衛

河崎七郎兵衛

高嶋弥兵衛

